

令和3年度 全領域合同研究交流会

全領域合同研究交流会（以下、交流会）は、本組織で最も盛んに学際交流が行われる会です。学際科学フロンティア研究所の教員の皆様と学際高等研究教育院の大学院生（以下、研究教育院生）が分野を問わず一堂に会し、研究分野・領域の垣根を越えて研究紹介や議論が行われています。平成26年度に始まり、昨年度で8年目の開催を終えました。本稿では、交流会運営委員として、私見も交えつつ、昨年度に引き続きオンラインで開催した令和3年度の交流会に関してご報告させていただきます。

1. オンラインでの交流会開催について

本会は例年8、9回行われており、一昨年度は後期のみの開催でしたが、昨年度は無事、前期に3回、後期に5回開催することができました。一昨年度から、対面での交流会開催が難しく、オンラインにて開催されてきました。使い勝手の良さから、昨年度も引き続きZoomを用いて開催いたしました。発表件数は、1回の交流会において、口頭発表を3件と、ポスター発表を10件程度依頼いたしました。発表者は研究教育院生が中心ではありますが、研究教育院生が学際研究の最前線に触れる機会を設けるため、ポスター発表に3、4件程度、学際科学フロンティア研究所の若手研究者の皆様にもご発表いただきました。

2. 口頭発表

例年通り、各発表あたり、質疑応答を含め20分間の持ち時間といたしました。異分野の聴衆が多数いる中で、多くの研究者と議論がより深まるようにするため、専門用語をできる限り避けて発表していただけるよう、発表者への周知を徹底いたしました。さらに、一昨年度に引き続き、當真先生をはじめとする学際研究フロンティア研究所の教員の皆様に、発表スライドの添削をお願いいたしました。ご協力いただいた先生方に対し、この場をお借りして御礼申し上げます。また、口頭発表では時間が足りない場合や、後々議論したい点が出てきた場合にも、十分に質疑を受けるため、一昨年度に引き続き、質疑応答に特化したクラウドサービス「slido」を利用しました。交流会開催日から翌日まで質問を受け付け、寄せられた質問は後日、発表者に送り、解答はメールにて参加者に共有いたしました。

3. ポスター発表

発表時間については、20分間×3回の区切りを設け、それぞれの時間内で研究内容の説明と質疑応答を完結してもらうようお願いしました。これにより、1回の交流会で複数のポスターを閲覧してもらうことができました。しかしながら、3回という区切りを設けたことにより、時間より早く議論が完結しても、区切りの時間まで他のポスターへ移動できない雰囲気が出てしまいました。そこで、区切りは目安であり、途中で別のポスターへ移動可能であることを周知いたしました。また、初めての試みとして、Zoomの振り分け機能を利用して、1回目の区切りでは聴衆をランダムにポスターに割り当てました。これにより、ポスター発表においても幅広い分野の聴衆が集まりやすくなり、各々が普段は積極的に聴講しないような演題を聴く機会を設けることができたと考えています。発表形式に

ついては、対面のポスター発表とは異なり、オンラインでは、1枚にまとめたポスター資料を使用すると読みづらくなるという欠点があるため、一昨年度に引き続き、発表資料は1枚にまとめるという制約を撤廃し、自由に作成していただきました。

4. 現状の問題点と今後の交流会について

一昨年度に引き続き、オンライン開催での交流会となりましたが、大きなトラブルもなく運営することができました。現在では交流会以外のセミナーや学会もほとんどがオンライン開催となっており、運営側・聴衆側共にオンラインツールの使用方法にも慣れてきたことが大きいのではないかと感じています。また、後期からは研究教育院生が増加したこともあり、参加者数も増加したと感じています。学際高等研究教育院に移動する必要がなく、物理的にも、時間的にも、参加しやすいということも利点としてはたらいたと考えられます。さらに、オンラインならではのツールを利用することで、現地開催ではなかった方法で学際交流を図ることができたと考えられます。しかしながら、同じ空間で聴講し、実際に顔を見合わせて議論できた現地開催とは異なり、オンラインでは議論が活発になりにくいという問題が感じられました。実際に、対面開催では交流会後も時間の制限なく議論が続けられている場合もありましたが、昨年度のオンライン開催では交流会後も議論されている様子が見受けられませんでした。特に、オンライン開催では口頭発表から始まり、ポスター発表で終わっていたため、口頭発表について議論する機会がないというご意見をいただいたこともありました。この問題を解決するため、後期の交流会では、ポスター発表の時間から、雑談用のブレイクアウトルーム（Zoom内で複数用意することができる部屋）を用意し、利用を呼びかけてみましたが、実際に運用した中で利用されたことはありませんでした。今後の開催形式が現地開催に戻るかどうかは、未だ不透明ですが、オンライン開催を続けるにあたり、自由な議論の場をいかに作り上げるかが、課題であると感じています。

最後になりますが、交流会の更なる発展をお祈りするとともに、昨年度の運営にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

学際高等研究教育院 博士研究教育院生
令和3年度 交流会運営委員
生命・環境領域 薬学研究科 山田 真佑花